



木

2月25日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

2月25日のおはなし「木」

何百年も生きて来た。何百年分のものがたりを知っている。

大木の足元でただぼーっと立っていたら、そんな言葉が浮かんで来た。ああそうか。このでっかい木はいろいろ見て来たんだな。おれが子どもの頃にもやっぱりここに立っていて、このあたりの暮らしを見ていたんだな。おれがまだちっぽけな子どもだったあの頃。携帯電話もなくて、デジカメもなくて、インターネットもなくて、コンビニもスタバも吉野家もマクドナルドもケンタッキーもディズニーランドもなくて、超高層ビルもなくて、夜中のテレビは砂の嵐で、猪木の新日本プロレスと馬場の全日本プロレスが世界の全てだった。

違う違う。そんなもんじゃない。この木はもっと前からここに立っているんだ。おれのおふくろやおやじが子どもの頃もここに立っていた。戦争だってもちろん知っている。火の粉くらい浴びたかもしれない。ほんの50～60年くらい昔なら、この木はもちろん立派な大木で、あたりを見おろしていたに違いない。出征する兵士を見送る行列も、遺骨となって戻る兵士も見て来たろう。出征の前に約束を交わす恋人たちがこの木の下で別れのひと時を過ごしたかもしれない。おれは思わず足を踏み替えた。

それからまだまだ前があることを思った。おれは学校が嫌いで歴史にはあんまり詳しくないからよくわからないけど、大正だの明治だの幕末・維新だのという時代にもやっぱりここに立っていて、人々の暮らしを見ていたのだ。いろんなやつがいたんだろうな、その頃も。いくつになっても優柔不断なやつも、きつといたんだろうな。そういうふにゃふにゃしたやつが上役にいたりして、そいつの注文がころころ変わるのに悩まされてた職人とかがその下にいたんだよな、きつと。

てやんでい、誰に何を言われたんだか知らないが、来るたんびに違うこと言いやがって、なんでい。人のいうことにぺこぺこ頭を下げて何でもかんでも、やりますやりますと安請け合しやがって。全体てめえの意見ってものあねえのか！なんて。その職人が怒鳴ったりしてね。すると上役に謝られたりなんかしてね。それでまた、やめてくれよ、あんた上役だろ？ 年上のくせに情けねえ！ とか言って。いやいや、何しろ士農工商の世界だ。口答えなんか御法度だつたらう。黙って理不尽な注文変更を聞いていたのかもしれない。

きつと年に一度の村祭りだかなんだかの無礼講のときには本当にはじけて騒いだんだろうな。おんなじような思いをしている仲間が集まって、憂さ晴らしをしたんだろう。どさくさに紛れてその上役の頭をはたいたりしてさ。そんなのもこの木は見て来たんだ。そりゃあもう、いろんなことを見て来たんだ。そう。ここは神社の境内だ。祭りの時には人々が集まり、夜なんぞにはよからぬたくらみをするものが集まったりしたかもしれない。それこそここで果たし合いをしたやつらだっていたかもしれない。そう思った瞬間、刀がざらりと光って、ちゃりん、と金属音を立てた気がした。

江戸時代どころでは済まないかもしれない。その前は、ええと、ええと、戦国時代とか応仁の乱とかムロ、クラ、なんとか幕府とか、まあいいや。でもその頃この辺に人は住んでいたのかなあ。村はあったのかなあ。この神社っていつごろできたんだろう。人がいなかったんなら、この木は何を見ていたんだろう。猿や鹿や猪なんかがうろちょろしているのを見ていたのかもな。梟なんか飛んで来たろうな。それくらい前になると、さすがにこの木ももうちょっと細くて、背も少し低くて、きつと若木だったんだろうな。いったい何百年くらいここにいるんだろう。どんなことを見て聞いて来たんだろう。その記憶がいっぱいつまってるこんなに大きくなったのかもな。

この立派な横木に首を吊ってぶら下がった奴は前にもいたんだろうか。木だって、そんな記憶をためこみたくはないよな。気の毒だ。そう考えると同時に、木の毒だ、という言葉が浮かんでおれは、は、は、は、と渴いた声を立てて笑っていた。そうだ。首つりの記憶なんてそれこそ木

の毒だ。立派な大木の寿命を縮めかねない。別に死ぬほどのことじゃあない。「万年子分肌の10歳年上の人の下で仕事をする」というややこしいシチュエーションにはほとほとうんざりだし、責任を押し付けられて詰め腹を切られるのは心外だが、おれが世界で最初って訳でもない。おんなじような思いをしているやつは過去にもいっぱいいたし、いまだってそこらじゅうにいっぱいいるだろう。わかるやつはわかってくれる。

おれはカバンを抱え直すとその場を離れた。ふと思いついて振り返り、その木にちょっとお辞儀しておいた。カバンの中の丈夫なロープは、そうだな、趣味に登山でも始めて使うとするか。

(「「万年子分肌の10歳年上の人の下で仕事をする」というややこしいシチュエーション」 ordered by HIRO-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

木

<http://p.booklog.jp/book/44782>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44782>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44782>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.